

Title	須須神社誌, 植木直三郎編
Sub Title	
Author	武田, 勝藏(Takeda, Katsuzo)
Publisher	三田史学会
Publication year	1924
Jtitle	史学 Vol.3, No.2 (1924. 8) ,p.176(337)- 177(338)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19240800-0177

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

日記、多聞院日記、鹿苑日録、中世の兵庫に關する文書。次に後者の中に收められたるものは、徳川時代の資料にして即ち

植崎九八郎様御書上之寫、井上文書、桃木文書、工樂文書、綱屋由緒書、南條文書、鷹見文書、増田文書、北風七兵衛文書、南鐸銀拜借願書、神田文書、北風勝次郎文書、楠公碑堂關係文書、橋本文書

本書總頁數約六百にして、他の二卷完成の上は同地の關係資料のほと全部を蒐集せらるゝ事なる。實に學界の爲め敬賀すべきである。

(大正十三年二月二十一日 武田勝藏)

島根縣史(島根縣史編纂掛編纂)

島根縣史三は「國造政治時代」にして、其の凡例中に左の如く記してある。

本書に記述したる國造政治時代の時限は上神武帝の創業に初り下大化改新に至る間我縣の重要な事實を叙述せり蓋し國造政治時代なる名稱を用ゐし所以は此期間に主とし國造が地方政治の首腦者たる地位に在りたるを以てなり。

次に本書の目次を參考迄に掲ぐれば、

第一章神武天皇の創業、第二章出雲玉作部及其遺蹟、第三章皇位繼承の變、第四章崇神天皇の治、第五章垂仁朝に於ける出雲第六章景行朝に於ける出雲、第七章成務朝期、第八章仲哀朝以後反正朝に於ける隱岐と出雲、第九章允恭朝以後推古朝の間、第

十章國造縣主稻置、第十一章屯倉、第十二章氷室、第十三章出雲族、第十四章出雲に於ける出雲族以外の諸氏族、第十五章出雲に於ける御名代部、第十六章出雲に於ける部曲、第十七章石見に於ける諸氏族の分布、第十八章石見に於ける御名代、第十九章石見に於ける屯田、第二十章石見に於ける部曲、第二十一章隱岐に於ける諸氏族の分布、第二十二章隱岐に於ける御名代、第二十三章隱岐に於ける品部及部曲、第二十四章氏族制度に於ける各階級の主從的統制

の二十四章にして章は各々節等に分かれ補遺を加れば其の頁數八一〇に達して居り、猶終に附圖十二を附して居る。本書の編纂は同史編纂委員野津左馬之助氏の擔任せられたるものである。

(大正十三年一月元旦 武田勝藏)

須須神社誌(植木直三郎編 須須神社發行)

須須神社(縣社)は石川縣珠洲郡三崎村大字寺家(能登半島東北端)に鎮座し、古來高座宮、金分宮の兩社を併稱し、又兩社を並べて高座金文兩宮或は金文高座兩宮と云ひ、又地名を冠して、須々權現、三崎大權現、三崎明神とも稱した式内社である。御祭神は、高座宮には天津彦々火瓊々杵尊、其相殿に美穗須々見命を金分宮には木花開耶姬命を、各奉祀して居り、崇神天皇の御宇に創建せられたと傳ふ。

本書は同社の沿革を詳述したる和装(百〇九枚)の美本である。本書の卷初に高座宮社頭以下兩宮の社殿の寫眞五枚と、同社所藏

の承安五年の國宣以下十數の古文書寫眞を掲げ、卷末には須々神社略圖一枚を附しておる。次に本文の目次をかゝげると、

一社號、二鎮座地、三社格、四創建、五祭神、六宮寺、七社領
八造營、九神職家、十祭祀、十一氏子及び崇敬者、十二附記(寶物等)

右の十二項にして、猶同社古文書集、縁起、鐘閣を附録して居る。右の古文書集には承安五年二月廿八日の國宣、文治二年八月日解狀以下七十一の古文書を記載しておるが、こは同社の神威と尊敬を語る貴重なる資料である。最近各地神社の其社誌等を編纂せらるゝやうになつた事は我等の常に喜んでおる處である。

(大正十三年五月十日 武田勝藏)

新選俳諧年表(平林鳳二著)

(大西一外著)

本書は文龜元年より大正十二年に至る四百十三年間に於ける著名の俳人七千餘名の傳記事蹟其他の事柄を年次的に摘扶略記したものである。猶没年の詳かならざるはいろは別として、俳家人名録と題しこれを卷尾に一括してある。俳人は勿論歴史家文學者の座右に備ふべきものである。

(大正十三年二月廿一日武田勝藏)

米國近世史(木村重治譯)

(國民圖書株式會社發行)

ある國とその國民を理解せんがための捷徑はその國の歴史を研究するを以て第一となすべきである。我國とアメリカ合衆國と

の關係は年代から云へば左程古いものではないが、これによつて兩國が蒙りたる影響は甚大である。然も密接なる關係を有する兩國民が如何なる程度まで互によく理解し會てあるかは甚しき疑問である。米國人の多くは未だに日本を詩の國と考へ或は日本人を野蠻人視し軍國主義的侵略的國民と考へてある。而して一方日本人に於ても亦米國の國民性や米國の政治組織や産業等に對して充分なる理解を有するものが稀少である。斯の如き現狀に在つては兩國民の間に完全なる友宜を増進することは到底不可能と云はなければならぬ。合衆國は既に排日法を制定して向後日本移民の入國を禁止したがため、これによつて最早兩國の間に從來の如き密接なる關係は斷絶したと考へてはならぬ、寧ろ兩國の國交は今後益々多事にして更に一層重大なる關係を生ずるに至るに相違ない。然るに我國内には米國史を研究し米國の國情を眞によく理解してゐるものゝ少いのは一個の不可思議と云はなければならぬ。かゝる時に際して本書が譯出せられたのは最も意義あることとして深く喜ばざるを得ないのである。

著者は序文に於て「本書の目的は現代の我國を知らんと欲する讀者の要求を充すことにある。故に余は特に社會及産業の問題に就て詳述したされどもまた其の方面にのみ偏することなからんことに注意した」として政治史にも重きを置きたる旨を述べてゐる如く本書は南北戰爭終結後の政治社會の狀態より筆を起し巴里講和會議に至る約半世紀間の米國史の諸相を敘述的に書いたものである。